貧困女子

……わたしの人生は、どう考えても最悪だと思う。

二十世紀が後少しで終焉を迎えるというその年、わたしはこの世に生を受けた。生まれた時、父はすでにいなかった。物心がついてから聞いた話によると、遺伝子学上の父親だという男は、母が妊娠したことを知ると姿を消してしまったそうだ。

母はわたしをひとりで育てた。

○学校を卒業し、わたしを妊娠したことによって○校を中退する羽目になった母は、最初、アルバイトをして生計を立てていた。だがすぐに生活に生き詰まり、水商売に手をだしたのだという。未婚の母、それも未成年で妊娠・出産をした母に対する世間の風当たりはかなり強かったそうだ。特に母の実家は娘の妊娠を知って激怒し、出産するとなって大激怒して、母とは家族の縁を切ったのだそうだ。だから母は実家に頼ることができなかった。

母は身体を売りながらわたしを育ててくれた。

食事を作ってから夕方遅くに出かけていき、陽が昇った頃に帰ってくる生活。日中は酒を飲んで死んだように寝ていた。わたしはなるべく母を助けようと、できることは何でもした。散らかった部屋の掃除、ゴミ捨て、洗濯物を洗って、干して、畳んで、しまった。食事の用意はしなかった。家に食材がなくてできなかったのだ。だからご飯はいつもコンビニのお弁当だったり、スーパーの半額の惣菜だったり、買い溜めておいたカップラーメンばかりだった。

わたしが小学生になってしばらく経った頃、母が男の人を家に連れてきた。

「この人が新しいパパよ！」

そう言ってうれしそうに笑う母の顔がとても印象的だった。

新しいパパという人は、身体にもの凄い量の刺青をした若い男の人だった。髪は太陽のように金色に染まっていて、耳や鼻には幾つものピアスをつけて

いた。へらへらと笑ってた。
わたしはこの新しいパパが嫌いだった。働きもせずにいつも家にいて、寝転んでテレビを見ながらゴロゴロしていた。新しいパパはお酒をよく飲んで、タバコも毎日のように吸っていた。母はいつも受け取った給料を新しいパパに渡していたが、新しいパパは「金が少ねぇぞ！」といってよく母を殴っていた。
わたしはたまらず母の前に飛びだして、
「お母さんを殴るな！　お母さんに酷いことするなッ！」
と叫んだら、わたしも殴られた。何発も、何発も、とても酷く殴られて、鼻の骨と歯が二本、折れた。でも、家にお金がなかったから、病院にはいけなかった。
それから新しいパパは、わたしを毎日のように殴るようになった。
新しいパパは、わたしを殴りながら、
「これは躾だ！　おまえのためにやってるんだよッ！」
と言っていた。
嘘だと思った。
だって、わたしを殴るとき、新しいパパはいつもニタニタと笑っていたから。
わたしは学校で腫れ物のような扱いを受けていた。小学校でも、中学校でも。決していじめられていたわけではなかったが、完全に無視された状態で過ごさなければならなかった。
誰もわたしと関わりを持ちたくなかったようだった。担任の教師ですら、まるでわたしのことが見えないかのごとく振る舞う有り様だった。
でも、それは当然だと思う。
わたし自身、鏡の向こう側にいる自分の姿を目の当たりにした時、関わりを持ちたいと思えなかったから。
どんなに貧しくても、時間だけは平等に過ぎてゆく。わたしは〇学校を卒業し、〇学生になって、そこで〇〇教育から離脱した。

新しいパパが多額の借金を残したまま死んだ。新しいパパは、どうやら色々な所から多額の借金をしていたらしく、そのトラブルの最中、用水路に浮いて亡くなっているのが発見された。遺書があったことから警察は自殺と処理したが、家に戻ってきたクズ男の身体には、無数の傷が刻まれていて、歯が幾つも無くなっていて、青紫色に変色した顔は倍以上に膨らんでいた。

わたしはクズ男が死んでホッとしたが、それも束の間だった。クズ男が残した借金が母の元にやってきたのである。母はクズ男の連帯保証人になっていたのだ。

わたしの家には毎日のように借金取りがやってきて、ドアを叩いて怒鳴り散らし、「金を返せ！」という趣旨の張り紙を何枚も張っていった。

心労がたたった母は、日増しに痩せていき、生きた屍のようになっていた。手も足も細くなり、頬もげっそりとこけてしまって、家にこもって爪を齧るような生活を送る毎日だった。

○学校に行かなくなったわたしは、年齢を偽って夜の世界でアルバイトを始めたが、それでも母が背負った借金は雪だるま式に膨らんでいく一方だった。身体を売ったりもしたが、とても返せそうになかった。

「もう……どうでもいいや……」

この頃、わたしは肉体的にも精神的にも疲れきっていて、自暴自棄になっていた。多額の借金のことも、弱り果てた母のことも、自分の未来に対しても、どこか投げやりになっていて、気づいた時には家を飛び出していた。

それから、わたしは自分がどのように過ごしたのか覚えていない。年齢もさることながら、学歴も、資格も、知識も、技術も、まともな社会経験もないわたしにとって、世間の厳しさは想像を絶するものがあった。

だから落ちて、堕ちて、墜ち続けて、気づいた時にはここにいた。

築何十年と経過した古びたアパートの一室――六畳の部屋と、ふすまで仕切られた奥にある四畳の部屋があるこの空間が、いまのわたしの世界の全てだ。

わたしはここで――男たちの欲望の餌食になっている……。

続きは本編にて